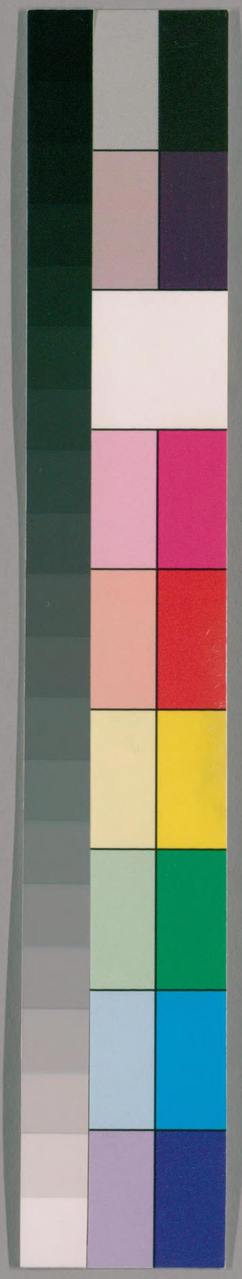

首書
古今和哥集

三四
五

857
55

取扱注意
函入

ガラス使用

夏哥の次第ハ[illegible]
郭公の声を[illegible]

一　春もすぎて池の汀の藤を
咲ぬ郭公はいつきなかんと
[illegible]思ふ心也

二　あはれてふ[illegible]
[illegible]
[illegible]

古今和歌集巻第三

夏哥

題しらず　よみ人しらず

一　わがやどの池の藤なみさきにけり
山郭公いつかきなかん

このうたある人のいはくかき
のもとの人まろがなり

う月にさけるさくらを見て
よめる

紀としさだ（大内記利貞　孝元天代之孫貞守男之）

二　あはれてふことをあまたにやらじとや
春におくれてひとりさくらん

帝國圖書館

志州
三ヶ所
[illegible]

帝國圖書館

ガラス使用

三　五月まつとハ卯月の末の事なれ
ばまだなかずさハ鳴羽をたゝき
まだ鳴ぬ郭公去年のふる声にても去
年鳴しこゑにてもまづなけと也

四　さ月ハふりつべくあらんかすと
あらんにハあらじとおもへばいまの
まださきにきゝたやの心也

五（さつきまつ）橘ハ五月より先四月よりまつ花なれ
ども昔の人を思出さ
せる物也　橘の匂ひぬるを思ひ出せば
袖のかほりする也　橘ハ
さ月に花さけれバ也

六　月日のはやくうつりぬるをよめる

七　時鳥の初て鳴を旅にたとへて
宿かりてとゞまれと也　橘に
てまつりとまり侍らんハうれし也

題しらず　よみ人しらず

三　さつきまつ山郭公うちはぶき
いまもなかなんこぞのふるこゑ

伊勢

四　五月こばなきもふりなん郭公
まだしきほどのこゑをきかばや

よみ人しらず

五　さつきまつ花たちばなのかをかげば
むかしの人の袖のかぞする

六　いつのまにさつききぬらむあしひきの
山郭公今ぞなくなる

七　けさきなきいまだ旅なる郭公
花たちばなにやどはからなん

八　こずゑはるかとハたかき梢
のうへ也　はるかに鳴てきこゆる
さま

九　主さだまらぬとハつまをさだめぬこ
ゝろ也　郭公の声をきゝて心ひかるゝ

十　いそのかみとハ大和の石上の事
ふるき都ハ奈良の都をいふ也

おとは山をこえける時に
郭公のなくをきゝてよめる
きのとものり

八　おとは山けさこえくれば郭公
こずゑはるかに今ぞなくなる

郭公のはじめてなきけるを
きゝて　そせい

九　郭公はつこゑきけばあぢきなく
ぬしさだまらぬ恋せらるはた

ならのいそのかみでらにて
郭公のなくをよめる

十　磯上ふるき都の郭公

まへしが旧るの人みやゝしさのこゑ也

十一　郭公をきゝてあらざる思ひよるぞ物思ふ時なるまゝそのこゑ也

十二　ふるさとの時なるを思ひて挽て出しかへさんぞ恋しきとゝ

十三　みがたくハなんぢが鳴里数こゝろはしうとましとこれあまたの里あるゝを指てこそ之

十四　思ひ出る時としつゝ常盤（ときハ）山あまりて又りゝ紅にふりそてとハ紅の衣を布がれつゝてふりそゝしてもしろ之又杜鵑

十五　涙血と之ハふりそゝめぐるを鳥出し時ば声をきゝて一入思ひハまさりん之

十六　我ハなくそもしても袖のひちかきに時なるの涙ハ見てゝぬるゝ

こゑばかりこそむかしなりけれ

題しらず　よみ人しらず

十一　夏山に鳴郭公心あらば
物思ふ我にこゑなきかせそ

十二　ほとゝぎすなくこゑきけばわかれにし
ふるさとさへぞ恋しかりける

十三　ほとゝぎすながなく里のあまたあれば（われ）
なほうとまれぬ思ふ物から

十四　思ひいづるときはの山の郭公
から紅のふりいでゝぞなく

十五　こゑはして涙は見えぬほとゝぎす
わが衣手のひつをからなん

十六　あしひきの山郭公をりはへて

跡ともなみだの出るらんと之

十六　をりはへてハおもくそ白し誰かまさるハわれじと云心と鳴るに心ありて誰がまさらし鳴とすゝめ也

十七　今山へ帰るなとこゑの名残惜し

十八　うき人をそふおもひ山に時なるをきゝて其の山にかへるまじとそ世中のすまゐも侘ぬとよつて世ありきん之

十九　時しもさみだれのき比物思ひて居たる折ふし鳴て行を聞るハ行方あのかへるやらんと云之

二十　夜ぞくれ鳴声をきゝてくらき夜るまでハやまよひてさそひやとらふべきかしとあくゝ我宿之と

たれかまさるとねをのみぞなく

十七　今さらに山へかへるな郭公
こゑのかぎりは我宿になけ

みくにのまち

十八　やよやまて山郭公ことづてん
我世中にすみわびぬとよ

寛平御時きさいの宮の
歌合のうた
紀とものり

十九　さ月雨に物思ひをれば郭公
夜ぶかくなきていづちゆくらん

二十　夜やくらき道やまどへる郭公
我宿をしもすぎがてになく

早ちりかれんそ
三十一　橘ハかはらぬに声ハ絶ぬる
花橘もかはらぬにと絶へし

三十二　明やすき夜のみじかきをそ

三十三　（あかずき）[illegible]くるゝに明るの夜なりけるを
あかずとなくとしきく之

三十四　（こゑ）声ふりたてゝハしきりなるを
人恋しき人や山に入けんと也

大江千里
三十一　やどりせし花橘もかれなくに
などほとゝぎすこゑたえぬらん

紀貫之
三十二　夏の夜のふすかとすれハ郭公
なく一こゑにあくるしのゝめ

壬生忠岑
三十三　くるゝかと見れハ明ぬる夏の夜を
あかずとやなく山ほとゝぎす

紀秋岑（孝元廿一代善岑男也）
三十四　夏山に恋しき人や入にけん
こゑふりたてゝ鳴ほとゝぎす

題しらず　よみ人しらず

三十五　去年ハね音ふるし今ハあらたに
めづらしくきこゆるまゝかはらぬといへり

三十六　空もとゞろにハとゞろくひゞきと
夜もすから物をうしとかよたゞなくや
[illegible]之

三十七　山彦ハ時鳥まつに鳴きこえて
よその[illegible]に入へき事とゝ行かへるとも

三十五　去年の夏鳴ふるしてし郭公
それかあらぬかこゑのかはらぬ
ほとゝぎすのなくをきゝて
よめる
貫之
三十六　五月雨の空もとゞろにほとゝぎす
なにをうしとかよたゞなくらん
さぶらひにてをのこどもの
さけたうべけるにめし
て郭公まつ哥よめとあり
けれハよめる
みつね
三十七　郭公こゑもきこえず山ひこハ

[illegible]
勅めて仕奉る[illegible]鳴声
も山彦ハ[illegible]
[illegible]
[illegible]のこゑ如[illegible]
[illegible]や

二十八　山にゐて人[illegible]郭公の比
[illegible]鳴けるをききて我のまちえ
郭公の人をまつ[illegible]の鳴をききてな
しこひけり
[illegible]こひしくなりたる事なり

二十九　[illegible]
[illegible]郭公をききて
なり

ほかに鳴音をこたへやハせぬ
山に郭公乃鳴けるを聞て
よめる
貫之

二十八　郭公人まつ山に鳴なれは
我うちつけにこひまさりけり
はやくすみける所にて郭
公乃なきけるをききてよめる
忠岑

二十九　昔へや今もこひしき郭公
ふるさとにしも鳴てきつらん
郭公乃なきけるをききて
よめる

三十　[illegible]
[illegible]卯の花のうき
世中に[illegible]之

三十一　不染世間法如蓮花在泥
人の心ハ蓮のごとし清きありさまに
[illegible]
[illegible]といへり

三十二　月を[illegible]之

躬恒

三十　郭公我とはなしに卯の花乃
うき世の中に鳴わたるらん
はちす乃露を見てよめる
僧正遍昭
桓武の御子良岑安王ノ男之俗名宗貞

三十一　はちすはのにごりにしまぬ心もて
なにかハ露を玉とあざむく
月乃おもしろかりける夜
あかつきがたによめる
深養父

三十二　夏の夜はまだよひながら明ぬるを
雲のいづこに月やどるらん

帝國圖書館

ガラス使用

三十三 いもと我ぬる寝（とこ）は夫婦あ
上を和（あひ）して云りいもと和ぬる
とこなつし[illegible]えんなり

三十四 行かふハ行ちがふ也かたへハ
くの字清てきくぞ

となりよりとこなつの花をこひに
おこせたりけ
ればをしみてこのうた
をよみてつかはしける

見つね

三十三 ちりをだにすゑじとぞ思ふさきしより
いもとわがぬるとこなつの花

みな月のつごもりの日
よめる

三十四 夏と秋とゆきかふ空のかよひぢは
かたへすゞしき風やふくらん

一 さやかにハ清く早涼のかよへる
此句の氣に知られたる也

二 殿上（てんじやう）人の川逍遥（せうえう）之
時あそびのうたなり

古今和歌集巻第四

秋哥上

秋立日よめる

藤原敏行朝臣（陸奥出羽按察使富士麿ノ男也）

一 秋きぬとめにはさやかに見えねども
風のおとにぞおどろかれぬる

秋立日うへのをのこどもかも
の河原に川せうえう
しけるともにまかりて
よめる

貫之

二 川風のすゞしくもあるかうちよする
浪とともにや秋ハたつらん

三　同じ

四　七夕にかはりてよめりまた
まつなりたるをまことしたる歎
そのころより立て思ふへし

五　別のかなしかるへきことを厭ひて
よめる

六　紅葉を橋にわたせはやとこそ
秋をしもまちてゐるゆへなるへく
いへり

七　同じ

題しらず　よみ人しらず

わがせこが衣のすそを吹かへし
うらめづらしき秋の初風

三　昨日こそさなへとりしかいつのまに
いなばそよぎて秋風のふく

四　秋かぜの吹にし日より久方の
あまの河原にたゝぬ日はなし

五　久方のあまの川原のわたしもり
君わたりなばかぢかくしてよ

六　天川もみぢをはしにわたせばや
たなばたつめの秋をしもまつ

七　恋ひ恋ひてあふ夜はこよひ天川
霧たちわたりあけずもあらなん

八　あさせしらなみとはあさせを
たどりまよひてわたりはてぬうちに
みしか夜の曙のとくあくるを悔之

九　同じ心にいひて（あさき）つらきぞ
年にてひとたびあふはあふかは
とかく

寛平御時なぬかの夜殿上にさぶらふ
をのこども歌たてまつれと仰られ
ける時人にかはりてよめる
とものり

八　あまの川あさせしら波たどりつゝ
わたりはてねばあけぞしにける

同じ御時きさいの宮の歌
合のうた
藤原興風

九　契りけん心ぞつらき七夕の
としにひとたびあふはあふかは

十 明之

十一 かしつる糸ねがひの糸也竹竿の
糸右左にかけつゝ年のをとは年
を續して絶ぬを云恋やわたらん
ハ七夕の心を察しかくて年にこそ
ながく恋わたらんかと疑ふ之

十二 こよひハあはじとハ七夕の契れ
なきといふ久しくそひて見よ

十三 明之

凡河内躬恒

十 年ごとにあふとはすれど七夕の
ぬる夜のかずぞすくなかりける

十一 七夕にかしつる糸のうちはへて
年のをながくこひやわたらん

そせい

十二 こよひこん人にはあはじ七夕の
ひさしきほどにまちもこそすれ

なぬかの夜の暁によめる

源むねゆきの朝臣

十三 今はとてわかるゝ時は天の川
わたらぬさきに袖ぞひぢぬる

やうかの日よめる

十四 いつしかハいつしか早晩と書
明日の夜をまつ事の切なる心そ

十五 木の間の月のあかりのさすを
見るにつけて物思ふ心
つくしなりとぞ

十六 大かたの秋とはよに初秋のくれ
ますますかなしき物と思ふ心の事を
思ひつくしてなり

十七 虫の声ハかなしきものなれども
しきものハ我身に思ひよるべし

十八 紅葉ちりて二八一年中でさへく
色のうつりかはるを世の中もかく
まりけりとぞみるなるぞ

十九 明之 秋くるよひハ露けかりけり

みぶのたゞみね

十四 けふよりハ今こんとしのきのふをぞ
いつしかとのみまちわたるべき

題しらず　よみ人しらず

十五 木のまよりもりくる月の影見れば
心づくしの秋ハきにけり

十六 おほかたの秋くるからにわが身こそ
かなしき物と思ひしりぬれ

十七 わがためにくる秋にしもあらなくに
虫の音きけばまづぞかなしき

十八 物ごとに秋ぞかなしきもみぢつゝ
うつろひゆくをかぎりと思へば

十九 ひとりぬる床ハ草葉にあらねども

らんるさと思ふなんなるへし

三十 大底四時心惣苦就中腸
斷是秋天このんを
[illegible]

内裏ニ五舎あり其一ツ也叔芳舎
の事也

三十一 ふけゆく空のけしきさえまさる
まゝに秋の夜をあかまてねむらん
あるへし故に人さへそといへり

三十二 仍之

秋くるよひハ露けかりけり

これさたのみこの家の
哥合乃うた（光孝の御子之二品大宰帥 亮少将是貞）

三十 いつはとは時ハわかねと秋の夜そ
物おもふことのかきりなりける

かんなりのつほに人〻あつ
まりて秋の夜をしむ哥
よみけるついてによめる

見つね

三十一 かくはかりをしと思ふ夜をいたつらに
寝てあかすらん人さへそうき

題しらす

よみ人しらす

三十二 白雲にはねうちかはしとふ雁の

三十三 夜もやふけぬらんと雁かねの
ふし空の隔して月をかくらく空の
けしきなるへし出之

三十四 ちゝとハ千ことと云月ハ悲そて
悲とも生すれハなり

三十五 月乃中の月ニひかりて云八万四千
久之月の桂こいふ事仏說ニ云り
たかさ五百丈と云々

かすさへ見ゆる秋の夜の月

三十三 さよなかと夜ハふけぬらし雁かねの
きこゆる空に月わたる見ゆ

これさたのみこの家の哥
合によめる

大江千里（大江音人男 兵部大輔）

三十四 月見れはちゝに物こそかなしけれ
我身ひとつの秋にはあらねと

忠岑

三十五 久かたの月の桂も秋ハ猶
もみちすれはや照まさるらん

月をよめる

在原元方

二十六　月如昼、ことさらあかき夜の
さまなるべし

二十七　我を思ふ人の許にまかりては
其のなげきもはるくへき事を
そのてかへり秋の夜なかきよと思
へるとぞ。秋の夜なかきうちに思
ひのまされりとなりしと

二十八　あくるもしらずなくといふにて
物かなしきさまを見せたり

二十六　秋乃夜乃月のひかりしあかゝれハ
くらぶ乃山もこえぬべらなり

人乃もとにまかれりける夜
きり〴〵す乃なきけるをきゝてよめる

藤原たゞふさ

（左京大夫興嗣男大和守従五位上）

二十七　蛬いたくななきそ秋乃夜の
なかき思ひハわれぞまさ（まさる）れる

是貞乃みこの家乃歌合

としゆき乃朝臣

二十八　秋の夜のあくるもしらずなく虫ハ

二十九　萩の色づくころの夜に蛬の
なくをきゝてわびしく思ひきこやし
より我ねぬハ我ねぬ事と也

三十　露ハさらでもさむけれバ秋ハことに
さむくつゆの夜さしむらん也

三十一　君をしのぶんより荒果（まつ）
人を思ひてわすれ草生（なき）
宿に松虫のなきしきりて

三十二　野行（やかう）の人の道にまよひて松虫の
声をきゝてその宿をかりなんとの心也

三十三　まつの名にある人まつ虫の
声を我かと思ふ心也

三十四　紅葉のちりてつもれる宿に（こゝら）
人まつかたもなし　いかなる人をまつらん

わがごとものやかなしかるらん

題しらず　　よみ人しらず

二十九　秋萩も色づきぬれハ蛬
わがねぬごとや夜ハかなしき

三十　秋の夜ハ露こそことにさむからし
草むらごとに虫のわぶれハ

三十一　君しのぶ草にやつるゝふるさとハ
松虫乃ねぞかなしかりける

三十二　秋乃野に道もまどひぬ松虫乃
こゑする方に宿やからまし（かりなまし）

三十三　秋の野に人まつ虫の声すなり
我かとゆきていざとぶらハん

三十四　もみぢ葉のちりてつもれる我宿に

巨とはおもひやりさとらんとて

三十五 日ぐらしハ蜩といふ虫なりとよめる
くらきの心也

三十六 なく日ぐらしハ山里のさびしき也
此二首ハ猿丸が哥也

三十七 初雁の声をきけハ待人のき
たらぬもめづらしく

三十八 蘇武が古事によりてよめり
雁の足にふみをつけておくりしとぞ

たれを松虫こゝら鳴らん

三十五 ひぐらしの鳴つるなへに日はくれぬと
思ふは山のかげにぞありける

三十六 ひぐらしのなく山里の夕ぐれは
風よりほかにとふ人もなし

はつかりをよめる
在原元方

三十七 まつ人にあらぬものからはつかりの
けさなくこゑのめづらしきかな

是貞のみこの家の哥合
のうた　とものり

三十八 秋風にはつかりがねぞきこゆなる
たがたまづさをかけてきつらん

三十九 稲負鳥よりいなおほせ鳥ハ秘事なり鶺鴒と云
或ハ雀又稲負又日かり紀に都
つぐ名早苗鳥又日護鶏罷院
思へる鳥の名ハ大やうにかくてきく
へし古今のうたとてよみかねて又
色こき木ぎの紅葉ハ秋鳴をまつといふ心之

四十 いとはやきといふ いとゞはやくと也
雁の鳴事のいとはやきと也

四十一 春の秋のかりがねをやよひなきてこそ有り

四十二 衣かり〳〵にハ衣をかりそへん
よりかりがねと云 衣をかるとかけたり
秋の萩のうつろふはなのおもひそふ
きこえよみて

題しらず　よみ人しらず

三十九 わがかどにいなおほせ鳥のなくなへに
けさふく風に雁はきにけり

四十 いとはやもなきぬるかりか白露の
いろどる木々ももみぢあへなくに

四十一 春霞かすみていにしかりがねは
今ぞなくなる秋霧のうへに

四十二 夜をさむみ衣かりがねなくなへに
萩の下葉もうつろひにけり
この哥はある人のいはく柿
本人麿がなりと

寛平御時きさいの宮の
哥合のうた

四十三 雁を[illegible]にたとへて也あまのと
[illegible]とハ空を[illegible]心也

四十四 秋の夜のねざめに思ひつゞ
けられし雁の鳴をきゝて雁も
鳴わたるといふ也

四十五 秋ハ殊に山里ハさびしきに鹿の
声をねざめにきゝてことに侘しきと也

藤原菅根朝臣
常陸守良尚男之

四十三 秋かぜにこゑをほにあげてくる舟ハ
あまのとわたる雁にぞありける

雁のなきけるをきゝてよめる

躬恒

四十四 うきことを思ひつらねて雁の
なきこそわたれ秋のよな〳〵

寛平の御時きさいの宮の哥合
のうた

忠岑

四十五 山里ハ秋こそことに侘しけれ
鹿のなくねにめをさましつ

四十六 猿丸[illegible]のちらしふみき
けて鳴鹿の声[illegible]きこえ
秋の[illegible]
読[illegible]
[illegible]

四十七 うらびれとハ物思ひ[illegible]
[illegible]足引とハ山といふまくら
詞也とよみハ響とおなじ也

四十八 しがらみふせてハ鹿の萩を[illegible]
[illegible]声ハ声也さやけ
さとハ花鶏とおなじ[illegible]
[illegible]

四十九 萩の[illegible]尾上の[illegible]
[illegible]尾上ハ山の[illegible]
[illegible]山といふ[illegible]

よみ人しらず

四十六 奥山に紅葉ふみわけ鳴鹿の
声きく時ぞ秋ハかなしき

よみ人しらず

四十七 秋はぎにうらびれをればあしびきの
山したとよみ鹿の鳴らん

四十八 秋はぎをしがらみふせて鳴鹿の
めにハ見えずておとのさやけさ

これさだのみこの家の哥
合によめる

藤原としゆきの朝臣

四十九 秋萩の花咲にけりたかさごの
おのへの鹿ハいまやなくらん

五十　ふる枝（え）ハ花を見ぬ久しきを
見るハ故人の心かはらぬといふ
心をよそへていへり

五十一　萩（えぎ）ハやうやく色かはり初るを
いひそへてひとり人のねさめとひ
やりくるゝ也

五十二　物思ふ比鳴鴈の泪をよそへて
いへり

五十三　此萬葉集に平城（ならび）の御哥也

むかしあひしりて侍ける
人乃秋乃野にあひて
物がたりしけるついでに
よめる
見つね

五十　秋萩乃ふるえにさける花見れば
もとの心ハわすれざりけり

題しらず　よみ人しらず

五十一　秋萩乃下葉いろづく今よりや
獨ある人乃いねがてにする

五十二　鳴わたる雁乃涙や落ちつらん
物思ふ宿乃萩乃上乃露

五十三　萩乃露玉にぬかんととれバけぬ

五十四　たわゝ　撓と義ともに同し

五十五　露ハ秋の久しく成りしと世にふれ
いしより又萩を愛（めづ）して見るへ
き

五十六　明也

五十七　名にハめでゝ落てあり僧正（そうぜう）
其の意ハ女郎花を女によそへて
我おちにきと人にかたるなといへり

よし見ん人ハ枝ながら見よ
ある人乃いはく此哥ハ奈良
乃みかど乃御哥なりと

五十四　折てみバ落ぞしぬべき秋萩の
枝もたわゝにをける白露

五十五　萩が花ちるらん小野の露霜に
ぬれてをゆかんさ夜ハふくとも

是貞乃みこ乃家乃哥合に
よめる　文屋あさやす（文屋康秀男也）

五十六　秋乃野におく白露ハ玉なれや
つらぬきかくるくものいとすぢ

題しらず　僧正遍昭

五十七　名にめでゝおれる計ぞ女郎花

ガラス使用

五十八　僧正遍昭か許へとゆく事ハ
妻をすてゝたゝん世をとひやう人へしき
に女郎花の男山に咲たると思ひ
よろしく思はすと云心也

五十九　野中に遊ぶ人にとても旅ならぬに
とあらしく女郎花をなつかしみて
なり

われおちにきと人にかたるな
僧正遍昭かもとにならへ
まかりける時に男山
にて女郎花を見てよ
める
布留の今道

五十八　女郎花うしと見つゝそ行すくる
おとこ山にしたてりとおもへは
是貞のみこの家の
哥合のうた
敏行朝臣

五十九　秋の野にやとりはすへし女郎花
名をむつましみ旅ならなくに
題しらす　をのゝよしき

六十　あやなく無益と書也あだ
とハ空と云心也
朱雀（すさく）の帝（みかど）ハ院（ゐん）にいましゝ名也

六十一　女郎花の打なひきたるを
さ様によそへて誰によすらんと
ゆかしく思ふ心也

六十二　女郎花ハ七月に咲けれハ
天の川ハ七月七日にて七夕によせ
ていへり

六十三　秋にあひて女郎花の色か外そ
まてあきらかなるをうらみなけきてしまき

美材小野篁孫俊生男也

六十　女郎花おほかる野へにやとりせは
あやなくあたの名をや立なん
朱雀院の女郎花合によみ
てたてまつりける
左のおほいまうちきみ

六十一　女郎花秋の野風にうちなひき
心ひとつを誰によすらん
藤原定方朝臣

六十二　秋ならてあふことかたき女郎花
あまのかはらにおひぬものゆへ
貫之

六十三　たか秋にあらぬものゆへ女郎花
なそ色にいてゝまたきうつろふ

ころ出て浦の人なりぬ物ごとく
女の心をうつしてよめる也

六十四 女郎花とつまとをうけてよめる
さるによりしるく

六十五 心明也

六十六 霧にちらに花をとがめて
かひよめる也

六十七 ひとり見んよりはとりすゑて
わがやどにみハ女郎花をひかれる
と我宿にうへて見んと也

なぞ色に出てまだきうつろふ

躬つね

六十四 妻こふる鹿ぞ鳴なる女郎花
をのがすむ野の花としらずや

六十五 女郎花吹すぎてくる秋風は
めには見えねどかこそしるけれ

忠みね

六十六 人の見ることやくるしき女郎花
秋霧にのみ立かくるらん

六十七 ひとりのみ詠むるよりは女郎花
わがすむ宿に栽て見ましを

物へまかりけるに人の家に
をみなへしうゑたりけるを

六十八 うしろめたき 影護と書
あはれなる宿にひとりさ
ぞハいかゞと見るの心也

六十九 花にあかでかへるハ無にて人に
あかぬハ野にねなまし也

見てよめる

兼覧王　（惟喬親王の男也）

六十八 女郎花うしろめたくも見ゆるかな
あれたる宿にひとりたてれば

寛平御時蔵人所のをのこ
どもさがのに花見んとて
まかりたりける時かへるとて
みなうたよみけるついでに
よめる　平貞文

（貞文古と申ぬ好色男也）

六十九 花にあかでなにかへるらん女郎花
おほかる野べにねなまし物を

是貞のみこの家の歌合

七十 明く

七十一 思ふ人の宿にきたりしかはだ
そふてのんとみ一夜ハ我宿に人の宿り
しその形見人のかをりそといへり

七十二 何人かきてぬきかけしとみ疑之

七十三 薄のほに出たるハ物侘しきに
ことに物思ふ人すゝきハ物思ひしき
ものゝあはれハかくぞ見ゆるあるなりと

七十四 秋野にくさとも見し花すゝきのおも
かまくやうにまねきバく

七十五 独ありこゝろおもふに蛬を聞
の声に咽さをとふへき人ても
なきハ秋のこゝや哀と思ふ人もなく

七十六 明く

によめる
敏行朝臣

七十 何人かきてぬぎかけしふぢばかま
くる秋ごとに野べをにほはす

ふぢばかまをよみて人に
つかはしける
貫之

七十一 やどりせし人のかたみかふぢばかま
わすられがたき香ににほひつゝ

蘭をよめる
そせい

七十二 ぬしゝらぬかこそにほへれ秋の野に
たがぬぎかけしふぢばかまぞも

題しらず　平さだふん

七十三 今よりはうへてだに見じ花すゝき
ほにいづる秋はわびしかりけり

寛平御時きさいの宮の
歌合のうた

在原むねやな（棟梁 業平の男之）

七十四 秋の野の草のたもとか花すゝき
ほにいでてまねく袖とみゆらん

素性法師

七十五 我のみやあはれと思はんきりぎりす
なく夕かげのやまとなでしこ

題しらず　よみ人しらず

七十六 みどりなるひとつ草とぞ春は
見し

七十七　たハれん風流に事ずきなん
さくろまさんと人なとがめそと也

七十八　ゆゑ

秋ハいろ〳〵の花にぞありける

七十七　もゝ草の花のひもとく秋の野に
思ひたはれん人なとがめそ

七十八　月草に衣ハすらん朝露に
ぬれての後ハうつろひぬとも

仁和の帝のみこにおはし
ましける時ふるの瀧御
らんぜんとておはしましける
道に遍昭が母の家にやどり
給へりける時に庭を秋の
野につくりておほん物がた
りのついでによみてた
てまつりける

七十九　あれてハ宿のさま人ハ老母の
ふりゆく也又ハ母なるものすりや
かきわりもよもぎをかりやまぢ
まゑのゝハ野也

僧正遍昭

七十九　里ハあれて人ハふりにし宿なれや
庭も籬も秋の野らなる

一 此哥序ニ文那へとあり貫之
秋と入ヽり山乃せの吹にあらくして
あらきにより草木をしほらするんなりて又
かり山乃風を嵐とよむと云説ハ
不宜むべといふ詞を思ひしらるへく
こゝろみるへし

二 草も木も色かはれとも浪の花ハ
かはらすといひて又一説ニハ人の心をく
まつらきなくふきくみんわしらすそ
かり大臣取へ何をいふ心みすて
あすべら吹物をあてにいへりとそ
此説いろいろぞ

三 明之

古今和歌集巻第五

秋哥下

是貞のみこの家の哥合のうた　文屋やすひて

一 吹からに秋の草木のしほるれはむへ山風をあらしといふらん

二 草も木も色かはれともわたつ海の浪の花にそ秋なかりける

秋の哥合しける時よめる　紀よしもち（新撰ニ紀長谷雄ト）

三 紅葉せぬときはの山ハ吹風のをとにや秋をきゝわたるらん

四 心明之

五 神無月ハ時雨といはん為にかく
九月の時雨もいまたふらぬ比を云
裏の説ハ秋雨の時雨をおもひて也
まさるへきさまをしへよめりとそ

六 ちはや振ハ神といはん枕詞そ
世間をうつろひてかんとうしなふ
つらきふもうつろふことをおもひて
よめり

題しらす　よみ人しらす

四 霧立て雁そなくなる片岡のあしたの原ハ紅葉しぬらん

五 神な月時雨もいまたふらなくにかねてうつろふ神なひのもり

六 ちはやふる神なひ山のもみちはに思ひハかけしうつろふものを

貞観（清和天皇ノ御時之）の御時綾綺殿のまへに梅の木ありけり西のかたにさせりける枝のもみちはしめたりけるをうへにさふらふをのことものよみけるついてによめる

七 心明之 秋ハ西より来ると云
事（かちおん）勿論之

八 秋の立日より吹初し風くら
りけるといふなり

九 明之 一つ色を千々にそめたるそれを
ふしぎといへり

藤原かちおん（勝臣）

七 おなじえだをわきて木の葉のうつろふは
西こそ秋のはじめなりけれ

石山にまうでける時音羽
山のもみぢを見てよめる

貫之

八 秋風の吹にし日より音羽山
峯のこずゑも色付にけり

是貞のみこの家の哥合に
よめる

敏行朝臣

九 白露の色はひとつをいかにして
秋の木の葉をちゞに染らん

十 露をはつゆと深（なら）きるとれ
されハ是も雁の涙も秋に増りけり
ますます露をさしてかく申す也

十一 明之 こと〳〵ハ毎之ことなるによ
りて染るをいへり

十二 明之 守山（もりやま） 漏（もる）と同の名也

十三 笠（かさ）を取と云んにハあるらむそ
あま笠ハえ人あれハつくろふ

壬生忠岑

十 秋の夜の露をばつゆとおきながら
雁の涙や野べを染らん

題しらず　よみ人しらず

十一 秋の露色々ことにおけばこそ
山の木の葉のちくさなるらめ

もる山のほとりにてよめる

貫之

十二 白露も時雨もいたくもる山は
下葉のこらず色付にけり

秋の哥とてよめる

在原元方

十三 雨ふれど露ももらじをかさとりの

十四 神のいかきにはふくずも時き
たれハうつろふと也世の中の理を見せし

十五 笠とりハ笠なれど人によりて雨ハ
ふれども紅葉ハてるといふ也

十六 散ねどもとハかぎりの色と見てそれ
つらしとよめるそ

十七 錦ハ旅人の為に立かくすらんと
霧の中にある紅葉をいへる也

山ハいかでか紅葉そめけん

神のやしろのあたりをまかり
ける時にいがきのうち
のもみぢを見てよめる

貫之

十四 ちはやぶる神のいがきにはふ葛も
秋にはあへずうつろひにけり

是貞のみこの家の哥合
によめる

忠岑

十五 雨ふれば笠とり山の紅葉ゝ
ハゆきかふ人の袖さへぞてる

寛平御時きさいの宮の
哥合のうた

よみ人しらず

十六 ちらねどもかねてぞおしき紅葉ゝ
ハいまハかぎりの色と見つれば

やまとのくにゝまかりける時さ
ほ山に霧のたてりけるを
見てよめる

きのとものり

十七 たがための錦なればか秋霧の
さほの山べを立かくすらん

これさだのみこの家の哥
合のうた

よみ人しらず

ガラス使用

十八 霧をハけさハたちそといひてもと
みんとおもひしもみぢをつけたる也

十九 佐保山之秋ハふかく色も深くなりける
なりもかくしともあさくて紅葉ハ見ゆべし
菊の色ハうつりやすき

二十 秋のなき時ハなくさかしなれども
ゆふおりんかぎりハ花ハちるとも根ハかれ
あらんかぎりハたえしとなり

十八 秋霧ハけさハなたちそさほ山の
はゝそのもみぢよそにても見ん
秋乃うたとてよめる
坂上是則

十九 佐保山乃柞乃色ハうすけれど
秋ハふかくもなりにけるかな
人乃前栽に菊にむすびつけて
うゑけるうた
在原業平朝臣

二十 うへしうへハ秋なき時やさかざらん
花こそちらめ根さへ枯めや
寛平御時菊乃花をよませ
給ける

二十一 菊を星かとうたがひあやまつと
也ハ殿上人のほの出のうたをこそや
そつと

二十二 菊を以てよはひをのぶる心
露ハ菊の葉を中まで地をわれハく
よ見へつる

敏行朝臣

二十一 久かたの雲のうへにて見る菊ハ
あまつほしとぞあやまたれける
この哥ハまだ殿上ゆるされ
ざりける時にめしあげら
れてつかうまつれるとなん
これさだのみこの家の哥合のうた
紀友則

二十二 露ながらおりてかざさん菊の花
おいせぬ秋のひさしかるべき
寛平御時后の宮乃哥合
乃うた
大江千里

人なる

二十三 おなし御時ハ寛平の御門也 右
大臣に侍りまし 此集の作者也

二十四 花かあらぬかハ見まかふを
いふ花とやせん浪とやせんと也

二十五 露を菊にして云

二十三 栽し時花まちどをにありし菊
うつろふ秋にあはんとや見し

おなじ御時せられける菊
合にすはまをつくりて菊
の花うへたりけるにくはへ
たりける哥 ふきあげの濱
のかたに菊うへたりけるに
よめる　すがはらの朝臣
道真聖廟の君参議菅原是善卿男也

二十四 秋風のふきあげにたてる白菊ハ
はなかあらぬか浪のよするか

仙宮に菊をわけて人のいた
れるかたをよめる

二十五 露のひるしばしの間のごとく僅なる
まにて仙人にあひて過しやそ
ちとせ経たらんといへる心なり

二十六 人を待比花の白かりけるを袖と
たゝ思ひよそへたるところをかし
花を詠て人待さまなとの古事
ならんかの不用之

二十七 菊の花とのこに見ゆるゆゑ
つくり物（歌かへ）をかしそのさまを見ざ
れどもうしろと此四首同時也

素性法師

二十五 ぬれてほす山ぢの菊の露のまに
いつか千とせを我ハへにけん

菊の花のもとにて人の人
まてるかたをよめる
とものり

二十六 花見つゝ人待時ハ白たへの
袖かとのみぞあやまたれける

おほさはの池のかたに菊うへ
たるをよめる

二十七 一もとゝ思ひし菊をおほさはの池の
底にもたれかうへけん

世の中のはかなきことを

二十八
聞之

二十九
心あてとハ霜の置まどハせ
に似て之折ハや折らんといふかさしの詞
其花を霜と紛して知しかたき所也

三十
咲比とうつろふ時とふたゝひ
にほふらし

思ひける折に菊の花を見て
よみける

つらゆき

二十八
秋乃菊匂ふ限ハかざしてん
花よりさきとしらぬ我身を

志ら菊の花をよめる

凡河内躬恒

二十九
心あてにおらバやおらん初霜の
をきまどハせる志ら菊の花

是貞乃ミこ乃家乃哥
合乃うた

よみ人志らず

三十
色かはる秋乃菊をバ一とせに

三十一
さかりの秋をすぎて又時こそ
あれとうつろふを愛したる也
貌隠の心事をよそへてなり

三十二
宿しとハ一家といふ心
なるそ

ふたゝび匂ふ花とこそ見れ

仁和寺に菊乃花めしける
時に哥そへてたてまつれ
とおほせられけれバよみて
たてまつりける

平貞文

三十一
秋をゝきて時こそ有けれ菊乃花
うつろふからに色のまされバ

人乃家なりける菊乃花を
うつしうへたるをよめる

貫之

三十二
咲初し宿しかはれバ菊乃花
色さへにこそうつろひにけれ

三十三　ちりぬべみとハちりぬへく思ふから夜るも見よと月のてらすと
也

三十四　岩垣(いはかき)ハ岩をかきに見立てたる也
紅葉ふを我身にたとへ日光ハ
君恩のたとへなるへし我身の沈
をなけくとの心そ

三十五　ある人文武行幸の時の御哥の由あり
定家卿の説に嘉禄本に書加(かきくはふ)
万葉良基公へ為世卿申上らるゝ之
古今此二字にあてゝ上の句ハ古

題しらず　よみ人しらず

三十三　さほ山のはゝその紅葉ちりぬべみ
よるさへみよと照らす月影

宮仕へひさしうつかうまつらで
山里にこもり侍りけるに
よめる

藤原関雄（治部少輔真夏か男下野守斎院長官）

三十四　奥山のいはかき紅葉ちりぬべし
てる日のひかりみる時なくて

題しらず　よみ人しらず

三十五　竜田川紅葉みだれてながるめり
わたらば錦中やたえなん

の字下の句ハ今の字にあてゝ古今一
部ハ此哥より出るといふ

三十六　神奈備(かみなび)ハ風ふくらしとハふと
ちりなんと云云　三室(みむろ)山ハ時雨ふる
らしといふより紅葉ちりし流るゝと云云
不審ハ此哥右注人丸哥としハ定家
卿之家本ハ人丸哥とハなし　紅葉
をそらし時の時雨を思ひあはすへき
此哥も古今の二字にあたりて此二首
ハ君臣の道此集の根源之亭（元数）お信
の時可守云云

三十七　恋しくハ見てもしのはん紅葉の散をしくハ来年の
の紅葉を見てこそ思ふへきとの心之

三十八　二ツの心有　秋風にさそはれてちる
紅葉のことく我身も定めなきをなけく
ところ也　又風にさそハるゝ紅葉ハ家
つとめもあらハ我ハゆくへにさためなき
との心

三十九　秋はきぬとハ秋の色ふかく成て秋ハ

この哥はある人ならの帝の御哥なりとなん
申す

三十六　竜田川紅葉ば流る神なびの
みむろの山に時雨ふるらし

又は　あすか川紅葉ばながる　（此哥右注人丸哥也ト他本ニ有）

三十七　恋しくは見てもしのばん紅葉ばを
ふきなちらしそ山おろしの風

三十八　秋風にあへずちりぬる紅葉ばの
ゆくへさだめぬ我ぞかなしき

三十九　秋はきぬ紅葉は宿にふりしきぬ
道ふみわけてとふ人はなし

るて紅葉ちりしける比なれは宿の
道もみえずなりぬるをとふ人ハなしとの義
四十 さらにやとハわざとゝりゆかんと也又と
はんとかきわけさまにふりかくしてし
道と見なからくるしきまよひのころ
かともみえつま
四十一 明之
四十二 風ハめに見えぬ色なれと赤黄そ
[illegible]ハちくさに見ゆるとなり
四十三 霜の経露の緯にして紅葉と
そのにしきもろくちるを惜むそ
すんてきもなし
四十四 世をハかなきものとひそかに觀して
心やすく人めをさけんとたのみし又
紅葉もちりはてしやと思ひ入しを
さていかなるへきそりや

四十 ふみわけてさらにやとはん紅葉ばの
ふりかくしてし道とみながら
四十一 秋乃月山辺さやかにてらせるは
おつるもみぢのかずをみよとか
四十二 吹風の色のちくさにみえつるは
秋乃木のはのちればなりけり
せきを
四十三 しものたて露乃ぬきこそよわからし
山乃錦乃おればかつちる
雲林院乃木のかげにたゝずみて
よみける
僧正遍昭
四十四 侘人のわきて立よる木のもとは

四十五 湊ハ水のとまる所也紅葉のさきとハ
水の流にとまりてめくるそのふかき
色を見る也
四十六 かゝる紅に水のくゝる事ハ神代にも
きかずとほめたる事なり
又ハ屏風をほめたる如く

たのむかげなく紅葉ちりけり
二条の后乃東宮のみやすん
所と申ける時に御屏風
に龍田川にもみぢながれ
たるかたをかけりけるを題に
てよめる
そせい
四十五 紅葉ばのながれてとまるみなとには
紅ふかき浪やたつらん
なりひら
四十六 ちはやぶる神代もきかず立田川
からくれなゐに水くゝるとは
是貞乃みこ乃家乃哥合

四十七
我きつし かへて志らぬくらかり
木の葉のちるまかふとくらぶ山
によそへていへる也

四十八
心通

四十九
富貴（ふうき）として故郷（ふるさと）に錦着（にしききて）
如（ごとく）夜行（よるゆく）がといへるもこの心也

乃うた　としゆきあそん

四十七
我きつる方も志られずくらぶ山
木々乃木の葉乃ちるとまがふに

四十八
神なび乃三室乃山を秋ゆけバ
錦たちきる心ちこそすれ

北山に紅葉をらんとてまか
れりける時によめる
つらゆき

四十九
見る人もなくてちりぬる奥山の
もみぢハよるの錦なりけり

秋乃うた　かねみの王

五十
竜田姫の心をこめて染なして
ちらするハたむくる神のあるゆへ
にこそとの心也　ぬさハ綾麻と書
又幣帛（ぬさ）
小野と云所山城ニ三所有　醍醐ニ
一所都のかたニ二所

五十一
秋の山紅葉をぬさとたむくるゆへに
我さへ旅心ちするごとく旅するぬさ
をたむくる事成べし

五十二
竜田川の水上神なび山也

五十
竜田姫たむくる神のあれバこそ
秋乃木の葉のぬさとちるらめ

をのといふ所にすみ侍る
ときもみぢを見てよめる
貫之

五十一
秋乃山紅葉をぬさとたむくれバ
すむ我さへぞ旅心ちする

神なびの山をすぎて竜田
川をわたりける時に紅葉
のながれけるをよめる
清原深養父
天武七代の孫豊前守房則男也

五十二
神なびの山をすぎゆく秋なれバ

五十三 眺望の前に紅葉の水にうか
びつゝながれて秋の趣しきりなるに白浪
にまじりて紅葉のさやき流れに紅
て行はなくさまし人のうかせなるは
海士の舟の行をなしてたとへ
思へるたとへて見り

五十四 水の流をみて紅葉のうく
をとかしられざるとの意也

立田川にぞぬさはたむくる

寛平御時きさいの宮の歌
合のうた

藤原興風（相摸道成男之）

五十三 白波に秋のこのはのうかべるを
あまのながせる舩かとぞみる

龍田川のほとりにてよめる

坂上是則

五十四 もみぢばのながれざりせば立田川
水の秋をばたれかしらまし

志賀の山ごえにてよめる

春道列樹（雅楽頭新名男之）

五十五 紅葉のちりかゝりて水をせく
ものはをりしも吹かくする風なるを
山川のちいさきながれに紅葉の嵐
にまよひてとゞまるはしがらみ商く

五十六 ちらぬかげさへとはちりてもちら
ぬともみゆるなり

五十七 画にかけるそのへんのたちて
又つゞき

五十五 山川に風のかけたるしがらみは
ながれもあへぬもみぢなりけり

池のほとりにてもみぢの
ちるをよめる

みつね

五十六 風ふけばおつるもみぢば水きよみ
ちらぬかげさへそこにみえつゝ

亭子院の御屏風のゑに
川わたらんとする人のもみぢの
ちる木のもとにむまをひかへて
たてるをよませたまひければ
つかうまつりける

五十七 立とまりみてをわたらむもみぢばは

[五十八] 稲負鳥とハ秋のえんによなく
ていふ秋の田のもに庭をなんてよ
ある也

[五十九] 穂に出ぬハ穂にも出ぬ比なるを
まだわかくてあるさ中の稲の侍りけり八
藤のうへ

[六十] ひつちとハかれた出ることゝもある也
こゝ八わか出ぬをよんていふ所ハ
つくしくの出かなくしてかよを
比してよみしなるへし

雨とふる共水ハまさらし

これさたのみこの家の歌
合のうた

たゝみね

[五十八] 山田もる秋のかりほにをく露ハ
いなおほせ鳥の涙なりけり

[五十九] ほにも出ぬ山田をもると藤衣
いなはの露にぬれぬ日ハなし

[六十] かれる田におふるひつちのほに出ぬハ
世をいまさらにあきはてぬとか

北山に僧正遍昭とたけかり
にまかりけるによめる

[六十一] 紅葉をもちかへりてうつりと思ふ人
人にみせんやの心也

[六十二] 貞観のふるき歌にも合見ての所
深山ハ山より落くる水をこゝろ
山に紅葉ふるかしに合ろ宮河
也秋八かきりとしるをこしむるの山
も紅葉ふるかしに合坂へのことそ

そせいほうし

[六十一] もみち葉ハ袖にこきいれてもて出なん
秋ハかきりと見ん人のため

寛平御時ふるき歌奉れとおほせ
られけれハ竜田川もみち葉なかる
といふ歌をかきてそのおなし
こゝろをよめりける

興風

[六十二] 深山よりおちくる水の色見てそ
秋ハかきりと思ひしりぬる

秋のはつる心を竜田川に
思ひやりてよめる

857
55

弘化四未とし
三千不瑞盛清七

六十三 みなとハ水のとゞ
まる所をいふ也

六十四 夕月夜ハをぐらといはん爲
なく一声にあはれなるのさ
びしく

六十五 秋をしたふてこゝにゆかん
とても秋の幣帛（ぬさ）をたむくる也

六十三
貫之
年ごとにもみぢ葉ハながるゝ立田川
みなとや秋乃とまりなるらん

なが月のつごもりの日大
井にてよめる

六十四
ゆふづくよをぐらの山に鳴鹿の
声乃内にや秋ハくるらん

おなじつごもりの日よめる
みつね

六十五
道しらバ尋ねもゆかんもみぢ葉を
ぬさとたむけて秋ハいにけり